

ノロウイルスの院内感染対策

『対策実例と微生物研究班アンケート調査結果をもとに』

○ 田平昭彦、小泉 章（奈良県微生物研究班）

ノロウイルス感染症は、突然の噴射性嘔吐と激しい下痢を特徴とする伝染性疾患である。近年、ヒトからヒトへの感染による集団感染が急増するとともに、病院や養護・介護施設、特に老人介護施設においては脱水による死亡例も認められており、大きな社会的問題となっている。

奈良県においても、11月以降冬季に感染者が急激に増加し、アウトブレイク例が後を絶たない状況が続き、一部報道される事例も見られた。今回、我々は、実際に経験した感染事例とその際に行った対策とともに、微生物研究班の参加施設を対象に行ったアンケート結果を基に各病院におけるノロウイルスの感染対策状況について若干の考察を加えて報告する。

< ノロウイルス感染事例の概要 >

平成 18 年 11 月 26 日より入院中の患者 2 名が氷様下痢の症状を呈しているとの報告を受け、I C T でノロウイルスを念頭に置いた感染対策を決定、各部署に注意を呼びかけた。しかし、一時は患者、職員をあわせて発症者が、計 10 人を上回る事態になり、所轄保健所にも届け出た。対策として、病棟から収集される情報をもとに感染対策委員会、I C T から環境整備の回数や、病院スタッフへの情報の発信、患者、来訪者への注意の喚起、職員の就業制限などの様々な対策が施行された結果、約 2 週間をかけて一連の感染事例は終息を見た。

< ノロウイルス感染事例の経過 >

2006.11.26 入院患者 2 名発症、各病棟臨時ラウンド、その他各部署の職員、入院患者で上記症状を呈しているものがないか、現状把握に努めるとともにアウトブレイクに備え環境整備 1 日 2 回を指示

2006.11.27 入院患者 6 名発症、計 8 名に、環境整備回数を増やした（塩素系消毒剤を用いた環境整備 1 日 4 回を義務付け）

2006.11.28 入院患者 2 名発症、職員 2 名発症
計患者 10 名職員 2 名、職員は自宅療養

2006.11.29 保健所に届出、新規発生なし
発症者 10 名

2006.11.30 患者 5 人減、発症者 5 名

2006.12.2 職員 1 名発症 自宅療養
患者 3 人減 発症者 2 名

2006.12.3 患者 2 名発症 発症者 4 名

2006.12.4 患者 2 名減 発症者 2 名

2006.12.8 患者 1 名減 発症者 1 名

2006.12.9 患者 1 名減 発症者 0

< 考察 >

今回のアンケートの結果では、全ての施設で何らかの対策が執られていた。しかし、患者と接する検査現場で起こりうる嘔吐などの突発的な事象に関する準備は十分とはいえず、また技師のノロウイルスに対する意識や知識についても不十分であると解答された施設が約半数あった。

また、今回の事例では、刻々と変化する状況に応じ、対策を効果的に変化させて対応することができたように感じられるが、普段より環境整備については完全に実施されているかどうかのチェックが必要であったと思われる。

< まとめ >

感染症流行時において患者と接する機会のある技師は、検査現場で嘔吐などないと過信せず、可能性としてありえると意識すべきである。ノロウイルスに対する院

内感染への意識付けや種々の対策は、検査部一部門として組織だってい、もしもの事態にスムーズに対応できるよう備えておく必要があると感じられた。尚、アンケート結果の詳細については、学会にて報告する。